

稲 山 会

通 信

第33号

2016年7月1日発行

発行人：斉藤雄二 発行所：稲門山の会事務局 TEL 03-3367-3723 FAX 03-3367-8150 ©稲門山の会1998

山の会創立60周年記念祝賀会報告

2016年度総会・新年会を兼ねた創立60周年記念祝賀会が、2月13日午後到大隈会館にて現役学生14名を含めて総勢92名の参加を得て盛大に開催されました。

60周年を記念して、上田代表による安全登山祈願、記念Tシャツの配布や上高地徳澤園での記念行事（本誌14頁参照）の発表、60周年に寄せてのOBによる興味深い話などで大いに盛り上がりました。



挨拶をする上田代表と聞き入る現役・OB諸氏

また昨年は多数の学生の入会があり、参加した現役学生の紹介とスライドを使った山行報告等があり、その後の懇親の場ではOBとの歓談を通して交流を深め合いました。

旧交を温め合うなか予定時間の3時間は瞬く間に経過し、最後は全員で肩を組んでの校歌の大合唱で締めくくり、別れを惜しみつつ来年の再会を誓い合いました。



上田代表による安全登山祈願



60周年記念Tシャツ



濱田前会長の挨拶



現役学生 14 人が出席し、自己紹介と山行報告がありました



懇親の場は大いに盛り上がりました



皆で肩を組んで校歌の大合唱



フレイフレイ「山の会」



全員集合写真

祝賀会出席者 (敬称略)

- 33年卒 高橋、清水、上田各 OB
- 34年卒 小松 OB, 上田 OG
- 35年卒 小島、大谷各 OB、阪本 OG
- 36年卒 新川、宮沢、清水、西山、荒川、山本、滝沢各 OB
- 37年卒 加納、山本、恩田、金子、鈴木、篠原、内藤、胡桃、竹内、村田、卯月各 OB
- 38年卒 宇野澤、栗又、松村、白倉、吉田各 OB, 古林、弘海各 OG
- 39年卒 秤、磯部、真下、三宅各 OB
- 40年卒 田野辺、梅崎、山崎、菊池、長谷川、井村各 OB
- 41年卒 斉藤、濱田 (前会長)、金子各 OB
- 43年卒 佐久間、上原、太郎良、猪股各 OB
- 46年卒 島田、新井、福田各 OB
- 47年卒 森田 OB
- 48年卒 松村 OB
- 49年卒 箕打 OB
- 50年卒 坂本、常数、後藤各 OB
- 51年卒 行方 OB
- 52年卒 石原、名達、倉本、倉川、深沢、岡安、高野各 OB
- 53年卒 柴原、狩野、角田、三宅、鹿間各 OB
- H2年卒 勝山 OB
- H4年卒 天野 OB
- 現役学生 今村 (前幹事長)、真藤 (幹事長)、厚木 (会計)、井上、猪又、大友、河野、佐藤、佐々木、立島、目次、森反、横山、鄒 (留学生)
- ゲスト 納見様 (故納見 OB ご夫人)、立田、高木様 (千露里庵倶楽部関係者)

島田弘康 (S46年卒) 記

会員近況報告

－ 創立 60 周年記念祝賀会の「返信はがき」より－

◆80 歳を五体満足・財不満足にて迎えました。山は登れると思うが、下りがだめです。週一ゴルフで遊んでいます。パーティーは出席します。出身は「真田丸」信繁の生地・信州上田です。

(S34 小松雅美) ◆現在の稲門山の会はマンネリ化している様な気がする。年々現役の会員が少なくなって来ている。現在の OB 役員と現役役員に大いに期待します。(S34 市村栄一) ◆最近、山登りから遠去かっていますが、久しぶりに 1,819m の会津磐梯山に登ってきました。頂上からの眺めは雲で何も見えませんでした。帰りに下から眺めると頂上までスッキリと見えていました。ついていないなあ～～(S36 西山賢嗣) ◆大河ドラマ「真田丸」の第 1 回放映でわが母校上田高校の校門が映り、校歌が流れました。これから 1 年が楽しみです。(S36 宮沢壮介)

◆古希を過ぎて早 7 年。専ら北海道・東北の“低名山”を探しながらの“独り山旅”を楽しんで、昨秋、元気に喜寿を迎えることができました。春・秋の「現役との合同ハイク」も楽しみです。今年もよろしく。(S37 恩田和夫) ◆皆様に宜しくお伝え下さい。残念ながら欠席します。2 月

9 日より約 2 週間アメリカポートランドの現地会社に出張し、その後カナダに廻り、2 月 23 日帰国予定です。(S37 打矢之威) ◆あいかわらず、山の絵を描いています。今回は昨年、金婚

の祝いで、スイスに行って来ました。アイガージャデックからのユングフロウを 100 号で描いています。示現会展に出展予定です。(S38 栗又功雄) ◆足腰の衰え対策に 13 階の自宅から

玄関フロアーへ新聞を取りに昇降しています。「山の会」OB としてのささやかな抵抗です。「稲山通信」に書かれた上田代表の巻頭文に心から賛意を感じ、努力されてきた役員、コーチの皆様に敬意を表します。(S38 松村啓之亮) ◆昨秋、小 6 の孫と蓼科に登って来ました。新人合宿

で登った最初の山で終わりにしようかなと思っています。(S39 稗勤) ◆確か 50 周年パーティーには出席したのですが、今回は行きたいと思いながら、スキーや旅行などの予定がつまっ

ていて本当に残念です。女性初の幹事長や留学生の現役の方達にもお会いしたいのはやまやまですが、申し訳ありません。ご盛会をお祈りします。(S40 井上(岡崎)昌代) ◆昨夏の白馬山行

で山に登る体力が大巾に落ちていることを自覚しましたので、今後は熊野古道の様な歴史ある山道を楽しみながら歩いてみたいと思っています。(S41 斉藤雄二) ◆今年も富山で冬の立山連

峰を楽しみました。最近では海拔 50m の裏山の神社へ年数回登るにも苦労しています。(S41 布村征司郎) ◆60 周年おめでとうございます。私も卒業 50 年になります。懐かしくも歳をとったものだと思います。新人の時の夏合宿・槍の北鎌尾根パーティーでした。遥か昔の話になりました。(S41 小島俊一) ◆①こころもち肘を折たる仕種にて山の端はるか覗く聖岳(ひじりね)

②七十の齢のきざはし今日越えて五十年ぶりぞ阿世潟峠越ゆ ③秋の陽を浴びてあかあかと聳

え給ふしもつけの高嶺まこと貴し。厳しい山、険しい山はなかなか行けなくなりましたが、日々山登り、山歩きを楽しんでいます。(S43 太郎良博) ◆週1回のハイキングを続けています。1日2回程度のウォーキングで、生活のリズムを保つ事にしています。医療機関の支援を、厚労省から厚労士会で、委託を受け、推進しているところです。(S45 青山和則) ◆地元の宇部山岳会の会長をしながら、近郊の山を楽しんでいます。(S48 西山一夫) ◆昨年は初冠雪直前の悪天候の中、白山に子供と登りました。(S51 石原順三) ◆月2回のペースでインドアクライミングジムで汗を流しています。岩登りを主に、現役の指導はこれからもお手伝いさせていただきます。(S52 亀田吉史) ◆ご無沙汰しております。申し訳ございませんが、欠席させていただきます。濱田教授に宜しくお伝えください。(H18 小泉(塚澤)幸子) ◆卒業間近で、4月から社会人になります。祝賀パーティーを楽しみにしております。ご準備ありがとうございます。(H28 今村梨沙/前幹事長)

㊦㊦ 60周年記念祝賀会にて新・旧会員 ㊦㊦



八ヶ岳天狗岳雪上訓練山行

島田弘康（S46年卒）

3月2～4日に現役2人OB2人で八ヶ岳天狗岳にて雪上訓練山行を行った。雪の少ないことを心配したが、前日に降った雪と好天に恵まれ充実した訓練山行を行うことができた。特に今回は風が強かったので、強風下での登山訓練にもなった。参加者は現役の真藤（2年）、厚木（1年）およびOBの井村、島田の4人。



黒百合平にて

3月2日（晴れ）

茅野駅に11時集合しタクシーにて渋ノ湯に向かう。渋御殿湯前で身支度を整え12:15出発。橋のたもとにある登山指導所ポストに登山計画書を投函しアイゼンを装着して登山開始。13:15八方台分岐にて小休止後14:40黒百合平着、天幕設営。現役天幕、OBヒュッテに分かれて泊まる。

3月3日（晴れ、風強い）

黒百合ヒュッテ前の斜面にて滑落停止の訓練後、8:20天狗岳に向かう。稜線上は風強く、耐風姿勢をとることもしばしば。9:30東天狗岳到着。暫し休憩後10:00下山開始、10:30黒百合平着。午後からザイルを使っての雪上訓練（確保、コンテ等）。夕食後テントに集合し、お茶・菓子にて交歓会をする。



東天狗岳山頂にて現役二人



凍結した播鉢池より天狗岳を望む

3月4日（晴れ）

8:00集合。9:10まで天狗の奥庭を3人でめぐり、播鉢池に降りて氷上歩行、岩稜歩行、新雪歩行訓練等を行う。9:25-10:30習得技術確認の雪上訓練。天幕撤収後、10:45黒百合平発、11:30八方台分岐、12:30渋ノ湯着。渋御殿湯の温泉に浸り汗を流す。14:55バスに乗り15:50茅野駅着。駅前の「そば茶屋」にて電車の時間まで歓談した。

春のハイキング（丹沢シダング山）

松村幹雄（S48 年卒）



現役の新人歓迎も兼ねて4月10日にOB・現役合同で丹沢南部のシダング山（震旦郷山）へ出かけました。新松田駅からバスで30分の寄（ヤドリキ）集落は丁度桜が満開でした。参加者は学生が10名、OBが12名で、山本OBの奥様と生後10カ月の長女も参加され、まさに老若男女です。ラジオ体操で体をほぐして、茶畑の中を登ると鹿・猪の防護柵から山道らしくなりました。意外と急登です。学生と元気なOBが先頭グループで、七十代も頑張っています。一方、悟りを開いたOB達は最後尾をのんびりと歩き、昼前に標高758mの山頂に着きました。歓談の中、昼食を摂り、展望を楽しみ、写真を撮りました。山頂に居合わせた他のグループは半世紀以上歳の離れた我々を不思議そうに見ていました。下山後、新松田駅前の居酒屋で恒例の現役・OB懇親会を開いて盛り上がりました。

コースタイム

新松田 9:40－寄 10:10（10:30）－シダング山 11:40（12:35）－宮地山 13:15－寄 14:05（14:40）－新松田 15:10

参加者

OB：白倉(S38)、吉田(S38)、井村(S40)、笠原(S40)、金子(S41)、斉藤(S41)、杉村(S41)
新井(S46)、島田(S46)、福田(S46)、松村(S48)、山本(H17)

現役：真藤(3年)、厚木(2年)、立島(2年)、目次(2年)、佐藤(2年)、木村(1年)、廣田(3年)
緒方(1年)、吉野(1年)、チェン(留学生)



山本OBの長女も山デビュー



山頂にて昼食タイム

投稿 「エベレスト街道に想う」

井上(岡崎)昌代 (S40 年卒)

1. はじめに

2015 年 11 月 5 日から 14 日間のネパールトレッキング（エベレスト街道・ナムチェ〜コンデリ）の参加者は、ガイド以下 8 人で、打矢 OB、小久保 OG と私の 3 人が山の会 OB・OG である。打矢 OB は今なお仕事も現役で世界中を飛び回り、帰途インドで商談予定とか。地震支援の為、食料や衣類を詰めた特大のスーツケースを 2 つ持参されていた。

1961 年私が大学入学当時、打矢 OB が 4 年生、小久保（旧姓鈴木）OG が 3 年生。世は登山ブームで大学に山のクラブが多かったのに、会の新人は 40 人余、総勢 100 人を越す大所帯の会で、女子は 10 人余だ。ついてゆけるのかと心細い時、小久保さん達が 6 月に女子山行として燕岳から大天井岳へと連れていってくれた。初めての穂高と北アを見て、私の心は決まった。あの夏の雲ノ平に、各パーティーが続々と集中する合宿は、実に壮観で忘れられない。

小久保 OG はご主人と白馬に移住後、20 年余も梅池自然園でボランティアガイドをされており、山はまだ現役だ。何十年ぶりかの再会で、当時の山の会の思い出話が毎晩尽きなかった。

2. カトマンズからナムチェへ

カトマンズは以前からの大気汚染に、4 月の大地震が重なって、道路事情やほこりは最悪で、ガソリン不足も深刻だった。明朝の準備を済ませ、ダルバード、モモ（餃子）とビールで乾杯するが、「お酒は下山まで禁止」とは厳しすぎる！

早朝の飛行機でルクラへ。気流の激しい急峻な山や谷の間を 40 分、ハラハラするうちに、次々とヒマラヤの白峰が窓から見えてきた。

ポーターと荷もそろい、いよいよトレッキングが始まる。このルクラからエベレスト街道はナムチェを経て、遥かカラパタルまで続くが、昔からどれだけの先人達が高峰をめざし、期待にみちてこの街道を歩いたことかと、胸が熱くなる。シェルパは地震で登山客が減ったと嘆くが、行き交う各国の人々の多さに驚く。

深い谷沿いの上り下りで、いくつもの峠や村を越え、急流を見下ろす吊橋を渡る。白く泡立ち岩をかむ急流は氷河特有の青さだ。山上の寺に色とりどりのタルチョがはためき、峠や街道のあちこちに、大小のマニ車や経文を刻んだマニ石がある。ロッジやレストランも多い山道をトレッカーや、身体よりも大きな荷を担いだポーター達の列、荷の重そうなロバや水牛（ゾッキョ）の群れとすれ違う度に、「ナマステ」のあいさつが交わされる。磨いたように光る岩角に街道の歴史を感じるが、それにしてもほこりと、生々しい糞のすさまじいこと。

パクジュンに 1 泊後、ナムチェ近くのポストで、入山手続きを済ませる。



ルクラに向かう出発の朝カトマンズ空港にて
(左から打矢 OB、小久保・井上 OG)

3. ナムチェからターモへ

ナムチェバザールは山腹に囲まれて、家々が階段状に密集している中心を、豊かな水路が流れている。この地方の交易の中心で、トレッキングの拠点であり、登山用品、衣類雑貨、土産物店でにぎわっている。ロッジの食堂に唯一あるストーブは材木のくずとヤクの糞を干した燃料のみで寒いが、熱々のシェルパスープやチキン、ポテトなどの料理はみなおいしい。食事の度に薬香草入りの熱いマサラティーが欠かせないが、3,400mというのに部屋には一切暖房もなく、毛糸帽をかぶってベッドのシェラフにもぐりこむ。

翌朝、朝日に輝くコンデリ本峰（6,186m）を見ながらの急登はさすが苦しかったが、シャンボチェに上がると、初めて視界が開け、待望のエベレスト、ローツェの連峰が雲ひとつない青空の下に白く輝いている。最高の眺望を楽しむホテルのテラスは大にぎわいで、熱いコーヒーを飲んでから、シェルパの郷クムジュンにむかう。クムジュンは地震被害も大きく、野口健氏が直後、3週間も支援に訪れたそうで、シェルパファンドのポスターがあった。白い石を重ねた壁に緑色の窓枠の家が点在して、畑も多く、のどかな村だ。

翌朝、ナムチェに戻る前、高度馴化の為、グングラという4,000mの展望台に登った。快晴で暖かく、エベレストをはじめ360度の展望がほしいままだ。雄大なコンデリ本峰が目前にそびえ、谷が深くて目的地までかなりのアルバイトを覚悟する。



エベレストを背に、左から3人目井上 OG、
4人目小久保 OG



エベレスト・ローツェ
(エベレストビューホテルより)



ターモ尼寺にて、井上 OG・打矢 OB



コンデリ本峰(6,186m)を背に、井上・小久保 OG

4. ターモからコンデリへ

11月11日、ターモで1泊の後、いよいよコンデリ前衛峰(4,250m)だ。コンデリ本峰の急斜面の長いトラバースが延々と続き、最後の急登で目的地まで8時間の予定である。しかし深い谷に流れ落ちる沢の凍結で渋滞して、9時間以上かかったという。テント泊だが1軒のホテルが営業中でよかったとのこと。

ところが、私は登り始めて急に呼吸が苦しくなり、それまでせっかく快調に馴化出来ていたのに、残念ながらナムチェに戻ることにした。同行してくれたシェルパは何と日本隊と共にエベレストに2回も登頂したというサミッターで、歩く道中、みながかけてきては立ち話をし、この地元でかなりの有名人なのだろう。イヤホンで聞いているのはダライ・ラマのスピーチだという。ダライ・ラマの住むインドの町に夫婦で2度も訪ね、長男はブダガヤで僧だとのこと。このあたりは、チベット仏教の信仰があつityうだ。

翌日、パクジュンにもどりコンデリ組を待つが、快晴に恵まれ、みな大満足で合流。宿で一人の日本人登山家が、アムダブラムから退却して来たという。中国隊がヘリで機材や人を運んで、キャンプ地がいっぱいで、テントが張れなかった。中国隊は登頂後又、ヘリで帰るとのことだが、そんな登り方もあるのか、全く今の中国そのものではと笑ってしまった。でもスイスアルプスなどでも登山鉄道や巨大なロープウェイであつityう間に3~4,000mまで上り、最高の山気分や美しいお花畑や、おいしいワインを誰もが容易にエンジョイできるのを思い出した。

初めてエベレストを見た1人が、「エベレストがもっと近くに見えると思ったのに、ちょっとがっかり」と感想をもらしたが、ヒマラヤはそれほど遠く遥かであり、自分の足で歩き続けなければ、めぐりあうことはできない。それこそがネパールの魅力だ。日本に行ったというシェルパが「京都の寺も、日本の文化もすばらしかった。でもネパールには8,000mを越える山々があつity、他の国にはない」と誇らしげに語った。

荷物をかつぐためポーター達は何日もかけ、遠い村々から集まってくるが、1日500~1,000ルピーにもならぬ賃金だという。ルクラで飲んだビールは1缶400ルピーだったのに・・・。

「ネパールは貧しいと言われているが、決して貧しいとは思わない。毎日同じものを食べていても、宗教心があつく、自然の環境の中で心豊かに生きている。その笑顔に魅かれる」と6回もネパールを訪ねた思いを小久保OGは語られた。私も今回出会った人々の笑顔とネパールの魅力は忘れないだろう。



チベット仏教の寺院にて
背景にタムセルク(6,608m)



ヒマラヤの子供たちと井上 OG

投稿 「神と仏の山」

太郎良博（S43 年卒）

かつて山は神であった。人は山を仰ぎ見ては、そこに神を見た。神は猛々しい霊力を持つとともに、またこの上ない幸をもたらしてくれるものでもあった。我が国に仏教が伝えられるとともに、古来、日本人の持つ自然崇拝の宗教的感性は仏教の教義を取り込み、両者は自ずからに習合していった。いわゆる神仏習合といわれるものがそれである。

我が国にあっては、多くの山岳が僧侶によって開山された。顕著な例を挙げるならば、播磨上人による槍ヶ岳の登拝、泰澄大師による白山の登拝、あるいはまた勝道上人による男体山の登拝・・・等々。そしてまた、このように歴史上に名前は残されてはいないが、全国数多くの山々が、僧侶によって開かれていったものと思われる。

しかしながら、ここでいう僧侶とは、今現在われわれが考えるようなそれとは異なり、むしろ「修験者」とか「山伏」とかと称される範疇の宗教者に相当するものであろう。

「修験者」や「山伏」は、日本古来の自然崇拝の観念を色濃く有する一方、仏教の教義をも深く身に付けた実践的、行動的な宗教者であった。彼らは、山野に分け入り、険しい峰々を踏破し、滝に打たれ、心身を錬磨することにより驚異的な験力を身に付けようとした。そしてそのようにして獲得した験力を、多くの民衆の済度に指し向けたものである。

よってこの種の山登りは、西洋流のいわゆる近代アルピニズムとは無縁のものというべきである。Climbing でもなければ、moutaineering でもない。山野跋涉、山岳登拝という言葉をもって捉えられるべきものである。しかしながら、明治維新の廃仏毀釈の嵐は、日本古来の宗教的精神性を無残にも破壊しつくした。修験道は壊滅的な打撃を被り、以後、修験者や山伏の存在は、われわれ庶民の日常生活から甚だ縁遠いものとなってしまった。そしてそれにあわせて、われわれ日本人の山登りの仕方も大きく変貌したのである。

* * * * *

「お父さん。どこか山に連れて行ってくれる。」と長男が言った。数年前のことである。40代によく手が届こうかという仕事盛りの長男が、私の DNA をしっかりと引き継いだものと見える。「よしきた！」と私は喜び勇んで、その願いを受け入れた。栃木に住まっている長男の事を考え、「日光の山はどうだろう。」と投げかけてみた。「そうだね。日光の山、いいね。男体山に登りたいな。」とのこと。親元を離れて高校時代を栃木で過ごした彼。寺から学校に通う道すがら、峠から、朝な夕なに男体山を遥かに仰ぎ見ては、「いつか登りたい。」と心に強く思っていたとの事。となれば話は簡単。「それじゃ男体山にしよう。」ということになった。



日光男体山と中禅寺湖

これまで私は幾度となく男体山には登っていたが、思い起こせば今回は、実に十数年ぶりの登山ということになるのであった。中宮祠の二荒山神社でお祓いをうけた後、いよいよ登拝にかかった。思った以上に登りはきつく、観音薙の急峻なガレ場には相当にてこずらされた。私より 30 歳近く若い息子も息も絶え絶えの感じであった。今ですらこんなに苦しいのに、千二百余年前の勝道上人の初登拝はどれほどに苦難をともなったものかと思いつつひたすら登った。登るに従い、眼下に紺碧の中禅寺湖が俯瞰されるようになってきた。それはまさに幾



男体山登山口、二荒山神社

度見ても見飽きることのない絶景であった。これぞまさしく、観世音菩薩の坐します補陀落浄土かと思うばかりであった。そうこうして登るうちに頂上へ到達。約 3 時間半かかった。かつての私なら、2 時間半もあれば登り切ったであろう。つくづくと体力の衰えを感じさせられた。だが、60 歳も後半を迎えての登拝には、かつてとは異なる深い精神的な味わいがあった。それはいわゆる世間にあるところの登山ではなく、いわば宗教的とも言うべき敬虔な思いを心に秘めた登拝の歓びなのであった。



中禅寺湖を背景に太郎良 OB

頂上には二荒山神社の奥社が祀られてあった。私は奥社に祭られている神にそして仏に、心からなる礼拝をなした。頂上には少なからざる登山者がてんでに食事をとっていたが、奥社の神仏に手を合わせる登山者はほとんど見受けられなかった。



男体山山頂付近にて太郎良 OB



男体山山頂にて長男

大変なきつい登行ではあったが、息子は憧れの男体山の頂に立つことができ、いたく感動の面もちであった。若かりし頃より、そして栃木に住まっている今もなお、朝な夕なに霊峰を仰ぎ見ている息子ならではの、それは深い歓びであると見えた。まことに父子ともども、実りある登山であった。

秋の陽を浴びてあかあかと聳え給ふしもつけの高嶺まこと貴し

若かりし頃の登山は、ひたすら体力に任せての山歩きであったように思う。重荷を負うての縦走はもとより、沢登り、岩登り、雪山、そしてスキー登山・・・等々。そこにはより深い精神性を求めての登山という姿勢は余りなかったように思う。だが年齢を加えるとともに、昨今ますます感ずるのは、古来の先人たちが履み行ってきた山登り、山に神を見、仏を見る、言い換えれば登拝という感覚での山登りへの憧憬であり、沈潜である。

昨夏、修験道の本山である聖護院門跡の山伏の方々と、霊峰富士を一気に登る峯修行に同行させて頂くご縁を得た。その途次、先達の澁刺たる先導のもと、「懺悔懺悔 六根清浄」（さ～んげさんげ ろっこんしょうじょう）と山念仏を高らかに唱えながらの登拝を体験して、つくづくと感じさせられるものがあった。「ああ、これこそが先人が履みおこなってきた山登りなのだなあ・・・」と。そして富士の絶頂に立った時、私は有難さと感動のあまり滂沱として溢れ流れ出る涙を止めることができなかった。私は新たに生まれ変わり、新たな生命を御山から頂いた、と実感したのである。

不二ヶ峯に三関四度の行了へてわが身わが心日々あらたなり



富士山峯入り修行勤行



富士山峯入り修行、山頂での勤行

山の会創立60周年記念行事のご案内 —徳澤園の夕べ—

山の会創立60周年記念行事の一環として、懐かしの「徳沢」で一夜を過ごす企画を立てました。槍ヶ岳・穂高岳の玄関口である上高地・徳沢には思い出の多いOB・OGの皆様も多いことと思います。この機会に大勢のOB・OGの皆様にお集まり頂き、楽しい一夜を過ごしたいと思えます。なお、現役学生もテント泊で参加します。青春のひとときをフラッシュバックさせて大いに盛り上がりましょう。皆様お誘い合わせの上ご参加下さい。奥様、お孫さんと一緒にの参加も歓迎です。

「氷壁の宿・徳澤園」を下記の通り予約してあります。徳澤園は早稲田大学に縁も深く、快く予約を受けて呉れました。徳澤園の詳細はホームページを参照下さい。

日程：2016年9月2日(金) 徳澤園1泊（夕食・朝食付きで10,000円）

相部屋を山の会用に貸し切り、20名で予約済み
なお、個室（1泊15,000～22,000円）も有ります

この機会に周辺の散策・登山を考えられては如何でしょうか？現在幹事を中心に幾つかのコースを検討中です。

- 1) 徳沢周辺の散策（上高地、明神、横尾等）
- 2) 常念・蝶から徳沢へ（またはその逆コース）
- 3) 槍を登って徳沢へ（またはその逆コース）
- 4) 涸沢から北穂・奥穂を登って徳沢へ（またはその逆コース）



徳沢周辺から奥又白

参加ご希望の方は7月31日までに幹事宛にご連絡下さい。その際お部屋のご希望（徳澤園に連泊、ご家族での個室希望等）および周辺の散策・登山をされる場合はそのコースも併せてご連絡下さい。なお9月2日の夜は全員集合での宴会を予定しています。



徳沢周辺から明神岳

幹事：

新井昭夫（S46年卒）

Mail: araia@nifty.com TEL:080-1161-5306

松村幹雄（S48年卒）

Mail: mykof04@s5.dion.ne.jp TEL:080-5175-9695

2015年度会計報告（2014年1月1日～12月31日）

稲門山の会

単位：円

項 目	収 入	支 出	残 高	備 考 欄
前年度からの繰越金（預金・現金計）			4,255,298	
年会費（振込分）	300,000			4,000円 x 75名
年会費（新年会時入金分）	153,000			4,000円 x 38名 + 1,000円
新年会会費	276,000			6,000円 x 46名
預金受取利息	436			
収入合計	729,436			
新年会費用		393,120		大隈会館支払
(旧)学生山の会のHP改訂費用(エッセンティア社)		12,960		
(旧)学生の山の会HP管理費(NTT スマートコネクト社)		43,740		4,860円/月 x 9 10月に新HPに統合
(旧)稲門山の会HP管理費 (NTT スマートコネクト社)		5,400		2,700円/月 x 2 3月に新HPに統合
稲門山の会管理費用（システム社）		42,960		
稲山会通信印刷費用（31号）		119,988		康印刷社
稲山会通信印刷費用（32号）		18,800		プリントパック社
東京都山岳連盟年会費		40,160		H26・27年分
振込手数料		4,644		
書籍代		16,308		
新人勧誘費用		26,556		サボートOB6名の交通費補助
新人募集資料代		10,221		パンフレット印刷、コピー費用
新人合宿費用		29,260		6月新人合宿（2バーティー）
60周年記念Tシャツ作成費		90,000		100枚
山の会共同装備購入費用		87,590		ザック(1)、シュラフ(2)他
事務局費用		35,670		切手代、封筒代
事務局費用仮払		164,330		
支出合計		1,141,707		
収支合計	729,436	1,141,707	3,843,027	単年度収支 ▲412,271
項目別預金残高内訳書				
一般会計：郵便公社預金			498,881	通帳残高額を確認済
年会費入金振替便口座			771,534	通帳残高額を確認済
みずほ銀行口座			557,565	通帳残高額を確認済
特別会計：遭難対策費（郵便定期預金）			1,000,000	通帳残高額を確認済
遭難対策費（みずほ銀行定期預金）			1,015,047	通帳残高額を確認済
預金合計			3,843,027	

上記の会計報告を致します

会計幹事 新井昭夫

（尚、別途会計監事が銀行通帳残高書と照合済です）

編集後記

本年の新人募集は当初は好調だったのですが、最終的に残ってくれたのは少数で、残念な結果でした。近郊の低山にハイキングに行く若者は多くても、本格的に山に取り組もうとする学生は少なく、これが現代社会の流れの一端なのでしょう。

33号の寄稿は井上（旧制岡崎）昌代 OG（S40 年卒）と太郎良博 OB（S43 年卒）にお願いしました。井上 OG の「エベレスト街道に想う」は、力強い文章にネパールの山と人を思いやる心情がにじみ出っていて、女性ならではの素晴らしい紀行文だと思いました。

太郎良 OB は修験僧の山々を自らも辿ってみたいとの意向があると聞き、自ら辿る山々の紀行を書いて欲しいとお願いした次第ですが、リードタイムが少なかったこともあり、今回の「神と仏の山」では、紀行された山は富士山・男体山に限定されました。太郎良 OB の優れた歴史・文化的素養に彩られた、白山・笠ヶ岳・槍ヶ岳を含めた修験僧登山「神と仏の山」続編を期待したいと思います。

今春は「エヴェレスト・神々の山嶺」が映画化されました。この映画の主人公・羽生丈二のモデルが森田勝であることはよく知られています。この森田勝が先鋭的な登山家としてデビューしたのは、雪崩の巣である谷川岳一の倉沢滝沢第三スラブの厳冬期初登攀でした。この厳冬期の通称「三スラ」を山の会の OB も登っています。この事実を知って、私は個人的に大変愉快でした。興味ある方は稲門山の会ホームページ「追憶の山-2（行方正幸 S50 年卒記）」をご覧ください。

私は山の会 4 年生（50 年前）の 5 月連休に、劔岳の北方稜線を縦走しました。厳冬期の「三スラ」の足下にも及びませんが、私の山の金字塔です。会社生活を終えた後、ほぼ毎年 5 月連休は、北方稜線の写真を撮りに富山に出掛けました。しかし春霞の季節で、よい写真は撮れませんでした。今年初めて、北陸道を下りたところで鮮明な？北方稜線が撮れました。北陸新幹線、線路の背後に劔岳本峰から三の窓、小窓、池の平山が撮れて嬉しかったです。三の窓で 2 昼夜吹雪かれ続け、生きた気がしなかったのを懐かしく思い出しました。

昨年現役が槍から日本海まで縦走した際の最後の山々、白馬や朝日岳が背後に見える、富山・入善チューリップ畑と劔岳北方稜線の写真を、僭越ながら載せていただきます。

齊藤雄二（S41 年卒）記



入善チューリップ畑、遠景に朝日岳



劔岳北方稜線

会員の皆さまにお願い

現在、会員の皆さまの連絡先を整備しています。メールアドレス等を変更された場合は、速やかに事務局（nadachi@editors-oak.co.jp）までお知らせ下さい。